

## 創作万葉能・間狂言「梅花の宴」について

令和四年正月十三日 有田百代

天平二年正月十三日。  
大宰府、大伴旅人邸にて梅花の宴が催されました。

それから1290年後・・・令和二年のこの時節。  
コロナという疫病が、不穏な空気を連れてきました。  
梅花の宴のような宴席は、未だ催すことはできません。

コロナがくる前のお正月には、  
家族揃って実家に帰り、たくさんの親戚と集まっておしゃべりに花咲かせ  
久々に会う学生時代の恩師、友人たちとお酒を飲みながら  
お腹を抱えて笑って語って、楽しい時間を過ごしました。  
いつになったらあの楽しい日々が戻るのかな、  
故郷の冷たい冬の香りを、目一杯吸い込んで  
心も体もシャキッと目覚めるのは、いつになるのでしょうか。

少しだけ 心もとなし ふゆやすみ 手にしたものは 万葉集

こんな時に効くのは、やはり巻五・正月十三日『梅花の宴』でしょうか。  
読み進めるうちに、故郷を懐かしむ歌に出逢いました。  
～梅の花折挿頭しつつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ 土師氏御道～

おおらかな宴の世界に心を委ね、気持ち慰めるはずでしたのに  
万葉人の気持ちを、1300年近く経ったここで体感し、  
心を重ねられたこと、嬉しくなってしまうました。

さて、  
約1300年ものちの京都に住む人間に、  
元気を与えることになろうとは、露知らずの大宰府は大伴邸に集う人々。  
しめっぼいのは苦手です。  
できることなら、宴はからっと楽しく進めていただきたいもの。  
なのにどうして、  
お酒の入る宴席は、こうも思う通りにはいかぬものなのでしょうか……

創作<万葉能・間狂言>

## 「梅花の宴」

▷大伴旅人

▷山上憶良

▷大伴百代

▷娘子児島

▷亡き大伴郎女

他

天平二年正月十三日に、帥の老の宅に集まりて、宴会を申く。

時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は佩後の香を薫す。加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥はうすものに封めらえて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁帰る。

ここに天を蓋とし、地を座とし、膝を促けさかづきを飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然と自ら放にし、快然と自ら足る。若しかん苑にあらずは、何を以ちてか情をのべむ。

詩に楽梅のを紀す。古と今とそれ何そ異ならむ。宜しく園の梅を賦して聊かに短詠を成すべし。

今宵はなんと淑い夜ぞ。

心地の淑い風、漂う梅の香り。

集う仲間もこれ、心淑い方ばかり。

今宵は、主人大伴旅人が催した宴席ではあるものの  
出席した多くの客人は、

ここ九州の大宰府で妻を亡くし、塞ぐ様子の旅人へ  
少しでも明るい気を送り慰めになれば・・・と

心を配っていた。

旅人の従人・大伴百代に関しては尚更の想いである。

なのに、なぜゆえ。

酒の入る宴会とは、思うような段取りにはいかぬもの・・・

旅人の動向を逐一目で追いかけては奔走し、心を寄せる従人、大伴百代。

あちらには、顔赤く、出来上がった様子の山上憶良。

百代「憶良さま、いかがなさいましたか、あなた様が酒に酔うなど、お珍しい。」

憶良「今宵はなぜゆえ。酒がすすむで仕方がない。

可愛らしい梅の花が誘おうものを、断れるわけがのうて」

百代「それはよろしいことです。

今宵は旅人さまを元気づける宴。憶良さまが頼りにございます。

後ほどのこと・・・よろしゅう・・・」

憶良「わかっておるおる、さあさ、百代殿も楽しもうではないか」

皆が集まり、今日は気分明るめか。今宵の宴の主人、大伴旅人。

客人たちに「見事な梅を目の前に歌を作ろう」と声かける。

『時あたかも新春の好い月、空気美しく風はやわらかに、梅は美女の鏡の前に装う白粉のごとく白く咲き、蘭は身を飾った香のごとき香りをただよわせている。のみならず明け方の山頂には雲が動き、松は薄絹のような雲をかすいてきぬがさを傾ける風情を示し、山のくぼみには霧がわだかまって、鳥は薄い霧に込められては林に迷い鳴いている。庭には新たに蝶の姿を見かけ、空には年をこした雁が飛び去ろうとしている。ここに天をきぬがさとし、地を座として、人々は膝を近づけて杯を酌み交わしている。すでに一座は言葉をかけ合う必要もなく睦、大自然に向かって胸襟を開きあっている。淡々とそれぞれが心の赴くままに振る舞い、快くおのおのが満ち足りている。この心中を、筆にするのでなければ、どうして言い現しえよう。中国でも多く楽梅の詩篇がある。古今異なるはずとてなく、よろしく庭の梅をよんで、いささかの歌を作ろうではないか。』

旅人「まずは一等、頼みましたぞ大式紀卿」

「正月立ち春の来たらばかくしこそ梅を招きつつ楽しきを経め」

旅人「ほう。なんと幸先のよい歌。今日の宴になんと気の淑い歌じゃ  
続いて小野殿、粟田殿。満開のこの梅を、なんと詠もうか」

「梅の花今咲ける如散り過ぎずわが家の園にありこそぬかも」

「梅の花咲きたる園の青柳は蔓にすべく成りにけらずや」

旅人「ほほう、またしてもよき歌よ。

酒がすすむすすむ、いい酔いじゃ。それでは憶良殿。  
そろそろあなたさまの出番ですぞ、お頼みもおそう」

百代「さき、憶良さま。出番にございますぞ。

どうぞそのお優しいお心持ちで、よき歌を」

こっそりと憶良を激励する百代。

なのに……何故。

憶良が高らかに歌いあげたその歌は・・・

「春さればま咲く宿の梅の花独り見つつや春日暮さむ」

旧知の仲、旅人の心情に寄り添おうと思ったか、酔いも手伝い  
憶良は、妻想う歌を披露する。

慌てる百代は小声で憶良を嗜める。

百代「憶良様、憶良様、

今宵の宴席の主旨からは、少しばかり外れておりますような。

今宵は、皆で明るく明るく。

旅人さまを元気づけ、つとめて明るくしようと

話おうたではございませぬか。気淑く、気淑く……」

またしても憶良

「愛しきよしかくのみからに慕ひ来し妹が情の術もすべなさ」

百代「ああ何故に、憶良さま。

これでは旅人さまが、悲しい気持ちを思い出してしまうではございませぬか」

先ほどまで機嫌よく酒を飲み、皆の歌に酔いしれていた旅人の顔が  
途端にくぐもってくる。

旅人「わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも……」

百代「ああ旅人さま。

そのようなお寂しい顔なさないでください。

梅の花散っているなど、どこぞの話でしょう。

目の前の満開に咲き誇っている、この白梅こそ。

あなた様を見るべきものにございます。

～梅の花散らくは何処しかすがにこの城の山に雪は降りつつ～」

不穏な空気を読んだ、少典山氏若麿。 歌を詠み場を繋ぐ。

「春されば木末隠れて鶯そ鳴きて去ぬなる梅が下枝に」

旅人「我が愛しき妻は、この満開の梅の向こうに隠れているとでも言うのか。  
ならば会わせてくれぬか。  
妻のおらぬ春など早く去ってしまえ、この梅の花も全て散ってしまえ。  
そうすれば、愛しい妻が姿を見せるであろう。」

旅人は一気に酒を煽り始めた。

百代 「ああ、なんと……」

もう見ていられぬ。と百代が庭に目をやると、今宵の宴席に呼ばれていた  
娘子児島の姿が、百代の目に止まった。

百代「・・・・・・・・・・はて、、そこのお方。そなた。  
少しこちらへ。  
そなた、この私の話を少し聞いてはいただけませぬか。」

困り顔の百代の話に、穏やかな面持ちで静かに聴き入る児島。  
急ぎ早口で話していた百代も、落ち着きを取り戻す。

百代「そうじゃ、児島殿。この白梅のもと、そなたの舞を見せてはいただけぬか。  
旅人さまも、きっとお喜びになられるはず。」

児島「私などの舞で場が持つのでございましょうものなら、  
いかようにもお遣いくださいませ。」

<～娘子児島 白梅の舞～>

兎島が舞いだした途端、客人は引き寄せられるようにその姿に見入った。

薬師高氏義通は感嘆の声をあげる。

～春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びにあひ見つるかも～

薬師張氏福子も同じく声をあげる。

「～梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや～  
なんとまあ。こんなにもお美しい方がいらした。  
旅人さま、  
梅の花散りぬとも、次には桜がまた咲くではございませぬか。  
春はまだまだ、ここにありますぞ」

百代「張氏福子殿は、誠にいいことをおっしゃる。

旅人さま、梅の花は散ったとて、次には桜が続くのです。

旅人さまとて、同じこと。

どうか、お気を落とさず。前をお向きになってくださいませ」

百代の声など耳に入らぬ様子の旅人。顔上げぬまま、弱々と歌を詠む。

旅人「わが盛りいたく降ちぬ雲に飛ぶ薬はむともまた変若ちめやも」

「雲に飛ぶ薬はむよは都見ばいやしき吾が身また変若ちぬべし」

百代「旅人さま、そのようなことをおっしゃいますな。

仙薬など飲まぬとも、あなた様は立派な丈夫。

この愛らしい梅の花浮かぶ酒を一緒に飲みましょうとも。

きっと、よきお心もちになりましょう」

その間も

美しき兎島の舞は、その場にいるものたちを優しく包み込んでいた。

客人たちが、口々に感動を述べる。

「何となんとお美しい。  
なんとあたたかく優しい舞であろう。」

～春なれば宜べも咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに～

～霞立つ春日の挿頭せれどいや懐しき梅の花かも～

美しい児島の舞に望郷の想い募る人々も現れた。  
涙を浮かべるものもいた。

「ああ、都の梅は今ごろいかばかりか。みたいものぞ」  
～梅の花折り挿頭しつつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ」

そこへ、ちらちらと梅の花びらが一枚、  
誘うように旅人の盃へ舞い込んだ。  
どこからか、と  
散りゆく梅の花びら求め、庭を彷徨う旅人…

～春柳鬢に折りし梅の花誰か浮かべし酒杯の上に～  
～梅の花夢に語らく風流びたる花と我思ふ酒に浮かべこそ～



<中入り>

ふと、見ると

亡くなったはずの妻が白梅を見つめ、佇んでいる。

旅人「郎女よ。そなた、なぜそこに……」

郎女「ずっとずっと、ここにおりましたよ。」

旅人「そうかそうか、全ては夢であったのか。

覚えてくれたか。まったく忌まわしい夢を見たことよ。

なあ、郎女よ。ゆっくり話そうぞ。」

郎女「ええええ。こんなにも淑き日に咲いた白梅。

今年も貴方様と見ることができ、大変嬉しゅうございます。

覚えておられますか、

二人で作った都の家の山齋。

今頃は、あちらの梅も蕾膨らんだ頃でしょうか。

ここ大宰府で、貴方様と並んで、

こんなにも愛らしい梅の花を愛でるなど、なんと幸せなこと。

このままこの幸せをと、願っておりました。

それなのに、私は

貴方様を置いていってしまいました。

随分とお可哀想な事をしてしまいました。」

旅人「何を言っておる、郎女よ。

そなたは、ここにおる。

そなたと離れている間の私は、随分と弱い人間になってしまった。

私を、置いていくなどいうな。」

郎女「貴方様は、決して、おひとりではございませぬ。  
この宴席の楽しそうなことを。  
こんなにも、いいお仲間にもまれて  
貴方様は本当にお幸せな方にございます。  
よきお仲間、どうかどうか大事にしてくださいませね。

もしも、ひとつ。  
私と約束をしていただけるとしたら、  
この季節白梅を見た時には、私のことを思い出してくださいませか。  
その時は、必ずや私はあなたのもとへまいります。」

旅人「何を言っておるのだ、郎女よ。わたしにはちっとも理解ができぬ。」

その時。  
強い風が吹き、満開の梅の枝を揺らした。  
舞い散る白梅の花びらの向こうに、妻は消えいってしまった。

～残りたる雪にまじれる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも～

涙浮かべ、呆然とする旅人を、  
百代と兎島が静かに見守っていた。

## <関連する歌一覧>

### 『梅花の歌三十二首併せて序』

天平二年正月十三日に、帥の老の宅に集まりて、宴会を申く。  
時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は佩後の香を薫す。加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥はうすものに封めらえて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁帰る。  
ここに天を蓋とし、地を座とし、膝を促けさかづきを飛ばす。  
言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然と自ら放にし、快然と自ら足る。  
若しかん苑にあらずは、何を以ちてか情をのべむ。  
詩に楽梅のを紀す。古と今とそれ何ぞ異ならむ。宜しく園の梅を賦して聊かに短詠を成すべし。

天平二年正月十三日に、長官の旅人宅に集まって宴会を開いた。  
時あたかも新春の好い月、空気美しく風はやわらかに、梅は美女の鏡の前に装う白粉のごとく白く咲き、蘭は身を飾った香のごとき香りをただよわせている。  
のみならず明け方の山頂には雲が動き、松は薄絹のような雲をかすいてきぬがさを傾ける風情を示し、山のくぼみには霧がわだかまって、鳥は薄い霧に込められては林に迷い鳴いている。庭には新たに蝶の姿を見かけ、空には年をこした雁が飛び去ろうとしている。ここに天をきぬがさとし、地を座として、人々は膝を近づけて杯を酌み交わしている。すでに一座は言葉をかけ合う必要もなく睦、大自然に向かって胸襟を開きあっている。淡々とそれぞれが心の赴くままに振る舞い、快くおのおのが満ち足りている。この心中を、筆にするのでなければ、どうして言い現しえよう。中国でも多く楽梅の詩篇がある。古今異なるはずとてなく、よろしく庭の梅をよんで、いささかの歌を作ろうではないか。

卷5・815 大式紀 卿きのまへつきみ

「正月むつき立ち春の来たらばかくしこそ梅を招をきつつ楽しきを経へめ」

正月になり新春がやってきたら、この日のように梅の寿を招きながら  
楽しき日を尽くそう。

816 少式せうに小野おのの大夫だいぶ

「梅の花今咲ける如散り過ぎずわが家の園にありこそぬかも」

梅の花は今咲いているように、散り過ぎることなく我が家の庭に咲き続けて  
ほしいよ。

817 少式あはた粟田あはた大夫

「梅の花咲きたる園の青柳は蔓かづらにすべく成りにけらずや」

梅の花咲く庭に、青柳もまた鬢かづらに程よくなっているではないか。

818 筑前つくしのみちのくちのかみやまのうへの守 山上 大夫

「春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つつや春日暮さむ」

春になると最初に咲く我が家の梅の花、私ひとりで見つつ一日を  
過ごすことなどどうしてしようか。。

819 豊後とよのみちのしりのかみおおともの守 大伴 大夫 (名未詳)

「世の中は恋繁し急やくしあらば梅の花にもならましものを」

世の中は恋に苦しむことが多いなあ。そうならいっそ梅の花にも  
なってしまいたいものを。

820 <sup>つくしのみちのしりのかみ</sup> 筑後 <sup>ふぢい</sup> 守 葛井大夫

「梅の花今盛りなり思ふどち挿頭かざしにして今盛りなり」  
梅の花は今は盛りよ。親しい人々は皆髪に挿そうよ。今は盛りよ。

821 笠沙弥

「青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし」  
青柳を折り、梅花をかざして酒を飲む。さあこの後は散ってしまっても  
もうよい。

822 主人（大伴旅人）

「わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも」  
わが庭に梅の花が散る。天涯の果てから雪が流れ来るよ。

823 <sup>だいいいばんしのももよ</sup> 大藍伴氏百代

「梅の花散らくは何処しかすがにこの城の山に雪は降りつつ」  
落梅は何処のこと。それにしてもこの城の山には雪の降り続くことよ。

824 <sup>せうげん あしのおきしま</sup> 少藍阿氏奥島

「梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林に鶯鳴くも」  
梅の花の散ることを惜しんで、わが庭の竹林には鶯が鳴くことよ。

825 <sup>としのももむら</sup> 少藍土氏百村

「梅の花咲きたる園の青柳を（糸）蔓かづらにしつつ遊び暮さな」  
梅の花も美しい庭に、青柳の蔓までして、一日を遊び暮らそうよ。

826 <sup>たいでんしししの</sup>大典史氏大原

「うち靡く春の柳とわが宿の梅の花とを如何にか分かむ」  
霞こめる春に美しく芽吹く柳と、わが庭に咲き誇る梅の花と、  
そのよしあしをどのように区別しよう。

827 <sup>さんしの</sup>少典山氏若磨

「春されば木末隠れて鶯そ鳴きて去ぬなる梅が下枝に」  
春になると梅の梢では姿も隠れてしまって、鶯は、鳴き移るようだ下枝の方  
に。

828 <sup>だいはんじたんしのまる</sup>大判事丹氏磨

「人毎に折り挿頭しつつ遊べどもいや愛づらしき梅の花かも」  
誰も誰も折りかざしつつ遊ぶのだが、なお愛すべき梅の花よ。

829 <sup>くすりしちやう</sup>薬師張 <sup>しのふくし</sup>氏福子

「梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや」  
梅の花が咲き散ってしまったなら、桜の花が続けて咲くよう  
になっているではないか。

830 <sup>こおびと</sup>筑前介佐氏子音

「<sup>よろづよ</sup>万代に年は来<sup>き</sup>経<sup>ふ</sup>とも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし」  
万年の後まで年はあらたまり来ようとも、梅の花は絶えることなく  
咲き続けるがよい。

831 壱岐守<sup>かみ</sup> 板氏安麿<sup>はんしのやすまろ</sup>

「春なれば宜<sup>うべ</sup>も咲きたる梅の花君を思ふと夜眠<sup>よい</sup>も寝なくに」  
春になったとてまことによく咲いた梅の花よ。あなたを思うと夜も寝られないものを。

832 神司<sup>かむつかさ</sup> 荒氏<sup>こうし</sup> 稲布<sup>いなじき</sup>

「梅の花折りてかざせる<sup>もろひと</sup>諸人は今日の間は楽しくあるべし」  
梅の花を遊ぶ人々は、こぞって今日一日が楽しいことだろう。

833 大令<sup>だいやうし</sup> 史野氏<sup>やしの</sup>の宿奈麻呂

「毎年<sup>としのは</sup>に春の来らばかくしこそ梅を挿頭<sup>きた</sup>して楽しく飲まめ」  
年ごとに春がめぐり来れば、このようにこそ、梅をかざして楽しく酒をくもう

834 少令<sup>しやうりやうし</sup> 史田氏<sup>でんしのうまひと</sup> 肥人

「梅の花今盛りなり百鳥の声<sup>こほ</sup>の恋しき春来たるらし」  
梅の花が今を盛りに咲く。鳥々の声も恋しい春が、やってきているらしい。

835 薬師<sup>こうしの</sup> 高氏<sup>ぎつう</sup> 義通

「春さらば逢はむと思ひし梅の花<sup>けふ</sup>今日の遊びにあひ見つるかも」  
春になったら逢おうと思っていた梅の花よ。今日の宴にこそ出会うことよ。

836 陰陽師<sup>おんやうし</sup> 儀氏<sup>ぎしの</sup> 法麿<sup>のりまろ</sup>

「梅の花手折り挿頭して遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり」  
梅の花も手折り、かざしては遊ぶのだが、なお飽きることのない日は、今日なのだなあ。

837 <sup>さんし</sup> <sup>しのおほみち</sup> 竿師志氏大道

「春の野に鳴くや鶯懐けむとわが家の園に梅が花咲く」  
春の野に鳴くよ、その鶯を呼び寄せようと、わが家の庭に梅の花の咲くことよ

838 <sup>おおすみのさくわん</sup> <sup>か</sup> <sup>しのはちまる</sup> 大隅 目 榎氏鉢磨

梅の花散り乱ひたる岡傍には鶯鳴くも春かた設けて  
梅の花の散り乱れる岡べには、鶯が鳴くことよ。春の気配濃く。

839 <sup>まかみ</sup> 筑前目田氏真上

春の野に霧り立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る  
春の野を一面に曇らせて降る雪かと人が見るほどに、梅の花が散ることよ。

840 <sup>そんしのおちかた</sup> 壱岐目村氏彼方

春柳（糸）蔓に折りし梅の花誰か浮かべし酒杯の上に  
春の柳を蔓にとて折ったことだ。梅の花も誰かが浮かべている。  
酒盃の上に・・・。

841 <sup>つしまの</sup> <sup>こうしのおゆ</sup> 対馬目高氏老

鶯の声聞くなへに梅の花吾家の園に咲きて散る見ゆ  
鶯の声を聞くに連れて、梅の花が我が家の庭に咲いては散っていくか見られる。

842 <sup>あまひと</sup> 薩摩目高氏海人

わが宿の梅の下枝に遊びつつ鶯鳴くも散らまく惜しみ  
わが家の梅の下枝に、たわむれつつ鶯が泣くことよ。上枝（ほつえ）に鳴けば  
花が散るだろうことを惜しんで。



843 はにししのみみち土師氏御道

梅の花折り挿頭しつつ諸人の遊ぶを見れば都しそ思ふ

梅の花を折りかざしつつけて人々の集まり遊ぶのを見ると、都のことが思い出される。

844 小野氏国堅

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだもまが乱ふ梅の花かも

恋しい人の家に雪が降るのかと思われるほどに、一面に散り乱れる梅の花よ

845 じゃう筑前象（※てへんに象）もんしのしいそたり門氏石足

鶯の待ちかてにせし梅が花散らずありこそ思ふ子がため

鶯が開花を待ちかねていた梅の花よ、ずっと散らずにあってほしい。

恋慕う子らのために

846 たもり小野氏淡理

霞立つ長き春日を挿頭せれどいや懐かしき梅の花かも

霞こめる春の長い一日を、かざしつつけても、ますます心ひかれる梅の花よ

めんぐわいふるさと員外故郷を思へる歌両首

847 （作者は旅人か）

わが盛りいたく降ちぬ雲に飛ぶ薬はむともまた変若ちめやも

我が盛りの年はひどく衰えたことだ。雲の上も飛べるようになる仙薬を飲んだとてまた若返ることはあるまい。

848 (作者は旅人か)

雲に飛ぶ薬はむよは都見ばいやしき吾が身また変若ちぬべし  
雲の中を飛ぶような仙薬を飲むよりは、一目でも都を見たら、賤しい我が身とて  
若返るに違いない。

後に追ひて梅の歌に<sup>こた</sup>和へたる四首 (作者は旅人か)

849

残りたる雪にまじれる梅の花早くな散りそ雪は消ぬとも  
残雪にまじって咲く梅の花よ、早々とは散るな、雪は消えてしまおうとも

850

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも  
春の白さを奪うかに咲く梅の花は今が盛りのことよ。見る人があってほしい。

851

我が宿に盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも  
我が家に盛りに咲いている梅の花は、今にも散りそうになった。見る人があってほ  
しい。

852

梅の花<sup>いめ</sup>夢に語らく風流びたる花と我<sup>あれも</sup>思ふ酒に浮かべこそ  
梅の花が夢に語ることは、風流な花だと私は思う、さあ酒に浮かべてほしい、  
と。

「一は云はく、いたづらに我を散らすな酒に浮かべてこそ」

「一は云はく、空しく私を散らしてしまうな。酒に浮かべてほしい、と。」

※作者別案

796山上憶良

は<sup>は</sup>愛しきよしかくのみからに慕ひ来し妹が情<sup>こころ</sup>の術<sup>すべ</sup>もすべなき  
愛しいことに、このようにばかり慕ってきた妻の心を思うと、すべもないことよ



